

廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論（二）

——研究史前篇——

橋本 富太郎

目次

はじめに

一、黎明期

二、『誕生百年 廣池博士記念論集』と内田智雄

（一）『記念論集』刊行

（二）廣池学

三、研究の展開

（一）『記念論集』のその後

（二）研究の活性化

（三）『日本の近代化と精神的伝統』と下程勇吉

（四）『廣池千九郎とモラロジ』と井出元

（五）『伝記 廣池千九郎』

四、モラルサイエンス研究の継承

（一）水野治太郎『経国済民』の学

（二）第二回モラルサイエンス国際会議

（三）特集『道徳科学の論文』を現代によみがえらせる試み

おわりに

はじめに

拙稿「廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論（一）——道徳における廣池千九郎の位置——」（『モラロジ』研究）七十三号、平成二十六年九月）では、廣池千九郎が最終的に道徳の研究と教育に身を置き、そのことが生前から後世にまでどのように位置づけられてきたかを概観した。

引き続き廣池千九郎研究史を検討し、課題を明らかにしていきたい。まず本稿では、廣池に関する論集の刊行および主な研究者の業績を中心に、研究史を時代順に辿り現在の状況を把握する。続く研究の分類と課題の抽出については次稿に回した。

前稿同様、「廣池」と「広池」の書体の相違は原文の表記による。敬称および敬語は省略させていただいた。

一、黎明期

前掲拙稿で述べたとおり、廣池は教育学および道德教育の分野で一定の評価を受けつつも、戦後日本社会における一般的認識の中では存在感は薄まり、その事跡と思想は断片的に言及されることはあっても正面から広く論じられることは少なかった。そのため廣池千九郎研究は、道德科学研究所における彼の教えを受けた門人筋によるものほとんど占められる状況がしばらく続いている。

廣池を論じた記事を掲載する機関誌は、『麗澤』（麗澤会、昭和二十一年六月創刊）、『道德科学研究所紀要』（道德科学研究所、二十二年五月、改めて第一号として復刊）、『社会教育資料』（同、二十六年八月創刊）、『道德科学研究所所報』（同、三十一年四月創刊）、『れいろう』（広池学園出版部、三十三年創刊）など¹、戦後早くから世に出ており、中には廣池の眞精神に迫る高度な内容もかなり存在する²。しかし、学術的・体系的な廣池研究となると、同研究所における昭和三十一年（一九五六）の研究部設置を経てさらに十年、四十年代初頭を待たなければならぬ^{3,4}。

この時期を画して廣池千九郎研究は急速な展開を見せるが、その契機となったのは、昭和四十一年（一九六六）、同研究所によって執り行われた「広池博士生誕百年記念行事」における

廣池の学問的業績の顕彰事業である。

同年十二月二十日には最初の論文集、『広池千九郎博士生誕百年記念論文集』（後述の『記念論集』とは別）が道德科学研究所研究部より刊行された。本書の廣池千太郎による「序」には、刊行に至るまでの多難な経緯が簡潔に記されている。まず研究部設置について、「モラロジーの学問的研究は、博士の死後一歩も前進しないまま三十年近くへてきたのが、去る三十一年四月に研究部が設置されて、はじめて組織的な複数学徒による共同研究の体制ができた」（本書、一頁）という。とはいえ、そのころの関係者の間に「学問研究の土壌がなかった」ため⁵、「はじめは苦難の時代」（同）だったとのことである。

その後研究部は、『道德科学及び最高道德の概要』改定作業や廣池著『道德科学の論文』第八版の刊行など、教育活動に伴う事業に携わることによって「存在が認められた段階」には入ったものの、「まず博士の思想と学問的業績を知ることからはじまるべきであるのは当然ですが、余りにも偉大で、余りにも膨大なモラロジーの体系と博士の思想を消化することはチョットやソットではできないものではありません」（同、二頁）と、困難が続いたことが回想されている。

本書は昭和四十年、その時の研究部長・岡田晃によって発案され、大塚真三部長はじめ、研究部の構成員によって執筆されたものだった。「十分の時間を各員のために、配慮できなかつ

た」こともあり、「研究の途上にある学徒のワン・ステップとして、あたたかく、ご覧いただき、きびしくご教導ください」（同、三頁）と、発展途上にあることを認めているように十分な内容でありつつも、廣池千九郎に関する学術的論文集が刊行されたことの意義は大きいと見るべきところであろう。

内訳は、以下の通り。

- 大塚真三「『道徳科学の論文』第一巻第十四章にみられる
廣池千九郎博士の人間観」
- 岡田晃「法学博士廣池千九郎先生の自然科学観」
- 桜井東樹「廣池千九郎博士の愛国心についての一考察」
- 目黒章布「廣池千九郎博士の経営観」
- 椿原三郎「廣池千九郎博士の人心開発救済についての考え方」
- 内藤幹治「知徳一体論についての一考察」
- 細川幹夫「ヨーロッパの旧家とその存続に関する一考察」
- 川窪啓資「A Case Study of East-West Synthesis: The Philosophical Background of Emerson's "The Over-soul" and "Brahma"」
- 黒川洋「モラロジー総合大学の構想」
- 水野治太郎「廣池千九郎博士の科学思想—学問観と方法の特色—」
- 西田基之「因果律を学ぶ第一段階として」

庭山琢夫「国家伝統の原理と天皇制」

以上が道徳科学研究所研究部内における廣池千九郎研究の黎明期であるが、平行して生誕百年記念事業では、研究所外の碩学たちによって本格的に学術的顕彰が行われた。⁶⁾

第一段階は、昭和四十一年十月十三～十六日、道徳科学研究所において開催された「廣池博士生誕百年記念秋季行事」における講演である。牛島徳次「『支那文典』について」、利光三津夫「『倭漢比較律疏』について」、廣池千太郎「『道徳科学の論文』について」に続き、最後に内田智雄によって「法制史研究史上における廣池博士の地位」が講じられている。⁷⁾

二、『生誕百年 廣池博士記念論集』と内田智雄

(一)『記念論集』刊行

この講演が弾みとなり、いよいよ本格的な論文集、内田智雄編『生誕百年 廣池博士記念論集』（廣池学園出版部、昭和四十二年。以下『記念論集』と略す）、同増補版（四十八年）の刊行に至った。

初版の構成は下記のとおり。

- 小沢栄一「明治期における史学の普及と史論—廣池千九郎の史家志望のしごと—」
- 牛島徳次「『増訂支那文典』の意義について」

永野賢「『日本文法てにをはの研究』の国語学史における位置」

利光三津夫「稿本『倭漢比較律疏』について」

内田智雄「広池博士の思想における『東洋法制史序論』の意義」

根元誠「『東洋法制史本論』の意義―特に支那親族法の研究をめぐって―」

高原美忠「『伊勢神宮と我国体』について―特に国体の淵源に関する広池博士の説―」

三瀨信吾「『日本憲法淵源論』の意義とその体系について」
増補版ではこれに、

森鹿三「『中津歴史』について」

西川順土「『古事類苑』と廣池博士」

の二編が加わり、利光の論文が増補され、「広池博士とその律令学」と改題されている。

本書の執筆者は、編者の内田智雄の呼びかけによって集ったメンバーが中心である。内田は本書刊行をはじめ、廣池の『大唐六典』⁽⁸⁾（広池学園事業部、昭和四十八年）、『東洋法制史講案』⁽⁹⁾（モラロジー研究所、五十二年）、『日本・中国法制史彙編』⁽¹⁰⁾（同、五十二年）、『大清商律評釈』⁽¹¹⁾（同、五十三年）、『清国調査旅行資料集』⁽¹²⁾（同、五十三年）、『東洋法制史研究』⁽¹³⁾（創文社、五十八年）と、廣池の遺稿刊行および補訂に尋常ではない精力を

注いだ。⁽¹⁴⁾

内田のこのようなはたらきをはじめ、廣池の顕彰に関わるようになったいきさつ、学問的態度などが余すところなく記されているのが、内田智雄『先学のあしあと』（広池学園事業部、昭和五十五年）である。

内田は東洋法制史を専攻していた関係上、廣池の名前と業績の一部は知っていたが、これほど関わるようになったのは、上記記念事業の講演を大澤俊夫が依頼しに来たことにはじまった。そして後年、内田が何度も言及することになる廣池千英の「孝心」と「人柄」に感銘を受け、千九郎の学恩に報いることを動機として上記にみえる顕彰活動に邁進することになった（『先学のあしあと』二頁）。

昭和四十二年四月九日には、内田の司会によって、座談会「広池博士を語る」（本書収録⁽¹⁵⁾）が開かれた。出席者は、内田、廣池千英、大澤、廣池千太郎、小沢、三瀨、根本、利光であり、『記念論集』刊行の経緯と廣池の業績が縦横に語られ、今後の課題を考える上でも非常に有意義な内容となっている。『中津歴史』が近代歴史学における「地方史」の最古の存在であったことやその独自の歴史観などが顕彰されたのもこのときであった。

また、内田は本書の中で、「東洋法制史」という言葉を最初に使った分野を開拓したのが廣池であることを明らかにして

いる（『先学のあしあと』二八一頁）。やがて法制史の分野に限らず廣池全般にわたる考察を深め、その人生全体の中における「東洋法制史」の位置づけを行うと次のように述べた。「先生の道徳学説とか、あるいは最高道徳とかといわれるものは、東洋法制史家としての先生の卓越した見識なくしては、生れ出でがたいものではなかったかと考えます。すくなくともその基礎のうえに、打ちたてられた思想であり、体系であることは間違いないであります」（同、一四七頁）。「今日の道徳科学は、博士の東洋法制史の研究から醗酵醗酵されたものであります、その意味では、博士の東洋法制史研究は、モラロジーの土壌であり、またその酵母であったということができるかと思えます」（同、一六八頁）。こうして廣池の道徳論形成における東洋法制史研究の果たした役割が明らかになったのであった。

（二） 廣池学

そしてさらに、内田は次のように「廣池学」なるものを提唱した。

ここで私が「廣池学」と呼ぶのは、博士が明治二十四年、年齢わずかに二十五歳にして著わした『中津歴史』以後——あるいはそれよりさらに遡って、それ以前の諸著作を加えてもまたよい——七十二歳の没年にいたるまでの全著作に見られる博士の学問体系の謂である。ここで私が、

あえて「廣池学」というのは、博士の著作がきわめて多方面にわたり、一見その学問領域を異にしているかの如き観があるけれども、博士の思想上また人格史上、それらは相互に有機的な関連をもっているのであり、加之、博士が晩年に唱道せられたモラロジー（道徳科学）さえも、東洋法制史研鑽の成果を血肉として成立しているということができるのであって、その意味において私は、モラロジーを含めてこれを「廣池学」と呼ぶのであるが、もしこのような立場からすれば、三十九歳の著作であるこの『東洋法制史序論』は、すでにその晩年の思想を胚胎していると思われることもできるわけである。（『先学のあしあと』一九七頁）

ここに廣池研究の一つの指標が立てられたといえよう。内田は方法についてもこう提示する。

「廣池学」を研究する場合、一般的な学問の方法論と同じように、そこに二つの方法の存することを指摘しておきたい。一は、完成された体系、すなわちその晩年の学問や思想を直接に研究対象として、これを遡原的に、その青年のそれに漸次遡って研究の歩を進める方法であり、他は逆に、学問や思想の素朴な萌芽状態に研究の足場をおいて、後の大成せられた学問や思想を、その形成発展の過程をとおして研究を進める方法とである。（同、一九七頁）

まさに、のちの廣池研究はこのいずれかの方法をとることが

主流となっていた。

『記念論集』刊行は廣池研究に時代を画し、その後の研究の基盤となる地平を開いた。そして、そのことは同時に新たな研究課題と方法を提示することでもある。内田はいう。「多方面にわたる博士の業績は、向後もなお、後学の研究対象たるに相応しい数多くの問題を提起しているからである。これが、私があえて『広池学』と呼ぼんとする理由の一つである」(『記念論集』二二一頁)と。

ところで、内田は早い段階から、廣池の論理展開についても次のような指摘をしていた。『東洋法制史序論』では、中国における法律の概念を「中正・平均」とし、日本との本質的な差異を明らかにすることが目的であったが、「これは私は東洋の法律の概念というものを、先生が論理的に分析し、追及しなかった結果、日本の法と違うということをいわれたものじゃないに、初めからそういう一つのシェーマがあつて、そしてかなり強引にそういう方向へもつていかれたものだとは私と考えております」(『先学のあしあと』九四頁)という。廣池の研究には「シェーマ」(図式)があらかじめ存在し、博引旁証ではあるけれども、史料をそれに引きつける形で強引に使用しているとのことである。

このあたりについては、かつて仁井田陞も『中国法制史』(岩波書店、昭和二十七年)の中で廣池の主張を「ドグマ的教

說的」であると主観性の強さを指摘していた(同書、六頁)。

また、『近代日本哲学思想家辞典』(中村元ほか、東京書籍、昭和五十七年)では、廣池の「中正・平均」説について、「このように、きわめて、倫理的・道義的な法律観を廣池は抱いていた。そしてかかる法律観は、『伊勢神宮と我国体』に代表される国体の研究へと広池を向けることにおいて何らの支障をきたすものではなく、かれにおいては、法制史研究と国体研究が一体のものとして追及されたのである」(四八九頁)と、廣池の法律観は「倫理的・道義的」であると同時に、国体研究に通ずるものがあることを示唆していた。

廣池の人生の鍵を握る『東洋法制史序論』に見えるこのような性質は、廣池研究における重要な論点を提起していると思われる。それは本書に限らず、廣池のすべての著述と事跡に一貫する思想といっても過言ではない。それはここでは仮に、「大義名分を明らかにし、人々の道徳心を高めることによって、皇室の弥栄と国家の発展に貢献すること」であつたとしておこう⁴⁾。このことは、多分に神道に関係する要素が含まれる。

三、研究の展開

(一) 『記念論集』のその後

『記念論集』で取り上げられたテーマの内、その後も研究が

受け継がれていったものはやはり東洋法制史であって、律令学については、利光を中心に継続されている。このようなところにも、内田の功績が見受けられる。内田は早い段階から律令の専門家・利光に廣池の遺稿「倭漢比較律疏」を披見することを勧めていた。利光の解題によって『倭漢比較律疏』は昭和十五年、公刊（内田智雄纂修、広池学園出版部）に至り、律令研究の世界に廣池の業績が提議されることになった。¹⁵⁾

例えば、昭和五十年より刊行された律令研究会編『譯註日本律令』（東京堂出版）における廣池の位置づけを見てみよう。本書は、瀧川政次郎が「本書ひとたび世に出る上は、今後の律令をいう者、いずれも本書の律文に拠らざるを得ないのであって、本書の出版は、律令研究史に新紀元を劃したものである」といって、決して過言ではないと思う」（『譯註日本律令』二、「序」八頁）というように、律令研究の金字塔であり、特に律においては後進の依拠すべき基本文献であるが、そこに廣池について次のように記されている。

大系本の「律逸文」において日本律の全く存しない条文を唐律で補っているものも日本律の存伏状況を知る手がかりになるが、廣池博士のとられた方法がより徹底している。（同、二〇頁）

そして、「その延長線上にこのたび採用したような形態が浮かび上がってくるのではなからうか」（同）といい、律本文の

収録方法に廣池方式を採用していることがわかる。¹⁶⁾

『譯註日本律令』では、律の典拠として「廣池千九郎編・倭漢比較律疏（廣池博士記念館蔵）」（同、二八頁）を挙げ、参考文献に、利光三津夫「続律令制とその周辺」（慶応義塾大学法学研究会、昭和四十八年）収録の「稿本『倭漢比較律疏』について」および、「廣池千九郎採摭逸文紹介」や、川北靖之「律逸文考」（『皇学館論叢』第四卷六号、昭和四十六年）収録の「廣池千九郎採摭逸文紹介」、同じく「律逸補遺」（同、第五卷二号、昭和四十七年）の「廣池千九郎採摭逸文紹介」（三一頁）を挙げており、律令研究史において廣池の業績が、定着されることとなった。

また、利光は『国史大辞典』において、「律逸」を執筆しており、ここに「戸田保遠『和漢合律疏』（麗沢大学蔵）」を挙げているが、これはまさしく廣池が京都在任時に大阪で購入した書であり、そこに書き込みしたものが『倭漢比較律疏』であった。

『記念論集』におけるテーマのうち、東洋法制史に次いで研究が継続されたものは、『古事類苑』に關してである。

西川順土は、『記念論集』以外にも、著書『近代の神宮』（昭和六十三年）や、『古事類苑』編纂史話（『古事類苑』月報に連載）等において度々廣池の業績に触れてきた。西川の研究は、『記念論集』をはじめ、それをもとにした『伝記 廣池千九

郎』をとおして、近代神道史家や『古事類苑』研究者に援用されている。¹⁷ また、西川の研究に関連して『古事類苑』月報には廣池の略歴を、一部誤りがあるものの生誕からモラロジーの提唱、大学の創始まで詳しく紹介している。¹⁸

(二) 研究の活性化

① 『モラロジー研究』創刊と『資料が語る廣池千九郎先生の歩み』の刊行

『記念論集』増補版刊行の昭和四十八年、この年は廣池研究において二つの大きな動きがあった。前者の学術雑誌『モラロジー研究』（年二回刊行）が創刊されると、内外の研究者による廣池千九郎研究は着々と積み重ねられるようになり、その後の研究成果の大半は何らかの形で本誌に関わる状況となった。

本稿掲載まで七十四号を数え、廣池に関係する論文も膨大な数に上るため、一部は次稿で取り上げるが、全体についてはインターネット上の目録 (<http://rc.moralogy.jp/moral/mokuroku.html>) に譲りたい。

後者、モラロジー研究所編『資料が語る廣池千九郎先生の歩み』（広池学園出版部、昭和四十八年）は、廣池に関係する重要資料を編年式に収録し、周到な解説が加えられて世に出された。伝記編纂にさきがけ、廣池の全生涯を豊富な資料により網羅しており、文献一覽も詳しい。生誕百年の際の研究成果も

取り入れられ、かなり充実した内容となっており、廣池研究に資する所多く、現在にいたるまで研究者に重宝されている。

② 『モラロジー創建五十年記念学術論文集』（昭和五十一年）

『記念論集』以後も廣池をテーマにした論集は幾度か刊行されてきた。廣池は謄写版『道德科学の論文』完成の大正十五年（一九二六）をモラロジー研究所の創立年としてきたので、それから五十年後の昭和五十一年（一九七六）には、これを期に『モラロジー創建五十年記念学術論文集』（モラロジー研究所）が編まれている。本書は、懸賞論文集（全二十八篇）であり、テーマも廣池千九郎に限ったものではないが、すべてモラロジーに関連し、そのため廣池への言及も多い。

ここでは、欠端実「モラロジーにおける歴史観」、桜井東樹「モラロジーの義務先行説の卓越性」、美和信夫「広池博士の天皇論と戦後の天皇（制）論」、横山良吉「モラロジーにおける平和思想、実践の特色」と、その現代的意義」、井出元「東洋の合理思想とモラロジー」、望月幸義「モラロジーの学問観および学問性について」、岩佐信道「モラロジーの現代的意義」など、その後の廣池研究をリードする面々の論考が掲載されている。

なおこの年、横山良吉には『廣池千九郎先生小伝』（廣池学園事業部¹⁹）が著わされた。本書は大部なものではないが、廣池

の人生全体をはじめ描いた貴重な業績といえる。

③モラロジ―研究所研究部編『道徳・教育・経済』（昭和五十八年）

本書をはじめ、京都大学名誉教授でモラロジ―研究所研究部顧問（当時）下程勇吉の喜寿を記念した論集として企画されたものだが、下程の固辞によりこのようなテーマで編まれることとなった。「まえがき」に「研究部としての最初の論文集」と位置づけられるように、当研究所研究部員によるモラロジ―研究の「一つの区切り」でありその到達点を表すものといえる。

ここまで至ったのは、「常に教育人間学的立場」をふまえた顧問の下程が「本質的全体の意味関連の把握の不可欠であることを、繰り返し厳しく指導」（本書、二頁）してきたことによるものが大きい。O・F・ボルノーやF・キウンメルなど、海外の碩学による論考が加えられていることも意味ある展開といえる。

本書は書名のと通りの三部構成で、第一部「道徳基礎論」、第二部「道徳と教育」、第三部「道徳と経済」となっており、全二十二編のうち第一部の、井出元「周易と広池千九郎の道徳思想」、目黒章布「広池博士の自然観」、水野治太郎「道徳哲学とモラロジ―米國カレッジ教育とモラロジ―カレッジ教育の比較」、第三部の永安幸正「広池千九郎の道徳経済一体思想」、土屋武夫「広池千九郎の経営理念」、以上が廣池千九郎研

究に深く関わっている。水野は前述の『廣池千九郎先生の歩み』編纂の中心的人物であり、長年にわたって世界的な視点からモラロジ―の現代的展開に尽力してきたが、本論文は西欧で生まれたモラルサイエンスとモラロジ―との関連を論じる嚆矢といえよう。目黒、永安、土屋の三篇は、廣池自身の中心的課題であった「宇宙自然の法則」、「道経一体」²⁰に関して時代を区切る研究に位置づけられるものである。井出の論考は後述する一連の東洋思想と廣池との関わりに関する一角を成すものであった。

（三）『日本の近代化と精神的伝統』と下程勇吉

本書は「明治以降の日本の近代化成功の根本原因」は「教育と道徳」にあったと見る視点から、日本の近代化を支え、導いた二十八人の事跡および思想を検討することによって、「彼等がいかにして日本の精神的伝統を継承し、実現していったかを学ぶこと、並びに、そうすることによって今後の人類の運命を担い、その大任を果たすことができる人材を育成すること」（はじめに）を目的に編纂された（モラロジ―研究所編、広池学園出版部、昭和六十年）。

本書は、下程勇吉の主導のもと「歴史的人物の思想のみを抽象的に理論的に論ずるのでなく、当該人物の人間そのものの具体的なあり方（履歴・生活・逸話・性格・業績等）」に即す

「人間学的方法」(二〇頁)をとっていることに特色がある。第一部 民族的国家的独立の問題、第二部 普遍的人類的地平の開拓、第三部 広池千九郎の最高道徳圏、以上の三部構成となっている。第一部では、日本近代化の必要条件としての日本の民族的国家的独立と精神的伝統との関係」(一二頁)を提起し、第二部では、近代日本の独立保持の上に成り得た「日本近代化の十分な条件」(一三頁)として、普遍的世界的な人間の足跡を辿る。そして、第三部において、廣池の関係者と廣池その人に至る。

第三部では、まず「広池千九郎の世界への道しるべ」にと、関連する人物を八名挙げて廣池の周囲を固めている。第一に恩師たち、「小川含章・井上頼圀・佐藤誠実・雲照律師」の四人を井出元が、「穂積陳重」を古賀勝次郎が取り上げている。これらの研究は、廣池がいかなる学統・道統を継ぎ、どのような環境で学問と人間性を磨いてきたかを整理、明確化する実に意義深いものであった。⁽²¹⁾ただ、前の四人については、その人物像を明らかにした上に、それぞれ廣池との関わりを述べる項を立てており、両者の関係まで明らかにしている一方、穂積との関わりについてはそこまでは至っていない。廣池は東洋法制史を開拓し、法学博士となるわけだが、その科学的研究方法は穂積に依るところが大きく、学位取得や進路の決定においても穂積の導きは絶大な存在であった。それらの諸点が検討されてい

ないため大きな研究課題を残しているといえる。⁽²²⁾

次に、廣池を早稲田大学に迎えた「大隈重信」、廣池を支援し主著に序文を寄せた「新渡戸稲造」、そして近い思想を持つ「杉浦重剛」と続き、最後に下程勇吉による「廣池千九郎」で結ばれる。

本書において下程は「単なる人間科学的地平を超えて、人間の本質的全体的構造ならびに一切の人間活動の意味付与根源を究明する哲学的人間学」(下程勇吉編『教育人間学研究』法律文化社、昭和五十七年、六六五頁)によって考察を進めた。こうした研究は、これまで法制史研究、倫理思想、教育者生活、宗教体験等々、様々な観点から個別に検討されていた廣池千九郎が、人間学的方法により「人間そのもの」が描き出された画期であったといるだろう。

さらにこの下程論文は、平成八年、下程著『日本の精神的伝統』(広池学園出版部)の中で日本史上に明確に位置づけられることとなる。本書は、日本倫理の歴史を、「神道的系譜」「仏教的系譜」「儒教的系譜」「世界的普遍的視野の系譜」の四つに系譜づけ、それぞれに代表的な人物を挙げ人間学的考察を加えている。最後の「世界的普遍的視野の系譜」は、一「福沢諭吉の文明開化主義」、二「内村鑑三の基督教的愛国主義」につづいて、三「広池千九郎の人類普遍道徳体系」で結んでいる。⁽²³⁾

本書は、「日本精神史のなかに廣池千九郎を位置づける」と

いう、下程に設定された研究課題に正面から応えたものであった。

（四）『廣池千九郎とモラロジー』と井出元

タイトルに「廣池千九郎没後五十年記念論集」を冠する本論集（モラロジー研究所編・廣池学園出版部、平成元年）は、先に触れた『生誕百年 廣池博士記念論集』の後を継ぐ意味が付与されている。生誕百年の『記念論集』は廣池を様々な観点から検討してはいたものの、『中津歴史』をはじめとする往年の学者時代の業績を個別に扱ったものであった。したがって、それら諸々の業績と自身の体験が醇化総合されたモラロジーの体系化や晩年の教育事業などについての研究は、積み残された状態にあったといえる。本書は、そのような課題をふまえ、「没後五十年を機会として」、「廣池千九郎の人と道徳科学研究上の業績を位置づけるという意図」（刊行のことば）のもとに企画された。

構成は次のとおり。

下程勇吉「神の原理」

内田智雄「廣池博士の思想学問の曲折と揺籃の時代」

勝部真長「廣池博士における思惟の展開」

阿南成一「法と道徳―モラロジーの現代適応のために―」

峰島旭雄「近代日本倫理想実践の中のモラロジー運動の

意義について」

ヴァルター・ドレーアー「廣池千九郎博士へのオマージュ」

井出元「廣池千九郎とモラロジー―学究と求道―」

大塚真三「廣池千九郎博士におけるモラロジーの発想と展

開―『道徳科学の論文』を中心として―」

永安幸正「廣池千九郎と最高道徳の構造―人類救済への実

践学を求めて―」

望月幸義「道徳実行の効果」

ロバート・ボール「モラロジーとイギリスの衡平法体系」

川窪啓資「廣池千九郎博士と西洋」

欠端実「廣池博士の平和思想」

一見してわかるとおり、廣池の最終的な登頂地点ともいうべきモラロジーの提唱および最高道徳の実践について多角的に論じられている。中でも、下程と井出の論考は両者の廣池研究の中核を成すとともに、それぞれの観点における現在の研究水準を表すものといえる。

すなわち、下程の「神の原理」は、廣池が「諸聖人の教説及び実行」の跡を慕い「全人格的求道」によって到達した地平を、行動と思想の両面から、丹念に史料をあげて描き出している。井出の「廣池千九郎とモラロジー―学究と求道―」においては、廣池の事跡と研究遍歴を詳細に跡付けながらモラロジーが形成される過程を明らかにしている。後進の研究者を大いに

益する論考であった。

井出はその後、ここでの論文に加えてこれまでの研究を集成して平成十年、『廣池千九郎の思想と生涯』（広池学園出版部）を上梓した。上記論集の「学究と求道」（大幅増補）から説き起し、「学統と道統」を系統立てて廣池の四人の師を挙げ、そして年来の『モラロジー研究』における所論によって廣池の信仰と伝統の問題を解き明かしている。ここに廣池の思想と生涯の蘊奥が公にされることとなった。⁽²⁴⁾

(五) 『伝記 廣池千九郎』

『伝記 廣池千九郎』（モラロジー研究所編刊、平成十三年）の刊行にも触れておかねばならない。伝記の刊行は、黎明期のところで触れた道徳科学研究所研究部発足当時の資料にも構構が見える長年の宿願⁽²⁵⁾であった。

本書が刊行されると状況は一変する。それまでに刊行された研究書は網羅的に参照されており、時代背景、家庭生活、研究と求道、関係者、そしてモラロジーの形成が詳しく、七三五頁にも及んだ。以前には、法制史家として、あるいは新宗教との関わりにおいてなど、それぞれの専門家らの断片的な理解に陥りやすかった廣池理解だったが、『伝記』は全体的にバランスのとれた内容となっており、全貌の理解に少なからず役立った。

本書の構成は、廣池の人生を時代順に七部に分かち、一中

津時代、二歴史家として立つ、三『古事類苑』の編纂と東洋法制史研究、四学位の取得と求道者としての歩み、五新科学モラロジーの樹立、六社会教育活動の展開、七生涯教育活動の展開、以上となっている。各部それぞれの内訳は編年体ではなく、テーマごとに独立したまとまりを持っている。このことは、廣池の人生は各部によって分かれた時代と時代の間で環境が激変しているの、それぞれの時代で区切り、時代ごとの中でテーマを分けて考察した方が理解が容易であることを表している。その半面、廣池の人生全体を貫く行動原理などが細切れになってしまい見えにくくなった点も指摘されるだろう。

また、読者の便を考慮して引用文はすべて現代語訳されており、紙幅の関係で初期の原稿の三分の程度が削除され、精神的葛藤など人生の深部が省かれているので、そのあたりは井出や立木の一連の研究論文等で補って見る必要がある。

なお、本書は英訳も平成十七年に刊行された。後述する平成二十一年の第二回モラルサイエンス国際会議参加の外国人が依拠した廣池像は本書によるものであった。

四、モラルサイエンス研究の継承

(一) 水野治太郎『経国済民』の学

「日本のモラルサイエンス研究ノート」という副題が付され

た本書（麗澤大学出版会、平成二十年）は、著者自身が「廣池千九郎のモラルサイエンスをめぐる筆者の長年の模索の一部を要約したもの」（七頁）というように、廣池による道徳の科学的研究を継承・展開してきた水野の研究が集成されているといえる。²⁶

「モラルサイエンス」という学問は、十八世紀の欧米で興った、人間、社会、国家のあり方・関係性を一つの大きな視野から議論する総合学であり、日本移入後も明治期には盛んに取り上げられていたが、専門分化あるいは高度化の潮流によって廃れていった。しかし近年、グローバル化の進展に伴い、人類が共通に実践すべき倫理（コモンモラルティ）探求の議論がモラルサイエンス復活の潮流を作っている（三頁）。

水野は、こうした動向を踏まえ、廣池によるモラルサイエンス（後にモラロジーと改称）の研究に光を当て、現代的展開を試みている。それとともに、廣池によるモラルサイエンスの形成と方法を、穂積陳重・八束兄弟との関連に注目しつつ、比較法学および歴史法学の研究史を汲んで読み解いていった。特に兄・陳重との関連では、その法律進化論の継承者に廣池の道徳進化論を位置づけ、両者の関係を自然観・倫理観・科学観などから解明しており、これは法制史学の観点からいっても、自然主義の立場から見てもこれまでに例を見ない画期的な見解といえよう。

水野の研究成果は、平成十九年刊行の『総合人間学モラロジー概論』（モラロジー研究所）にも反映されており、水野自身により『経国済民』の学』はその姉妹編に位置づけられている（同書、二五二頁）。

（二）第二回モラルサイエンス国際会議

本会議は、「倫理道徳の理論と実践―モラロジーにおける廣池千九郎の業績の評価―」をテーマに、平成二十一年（二〇〇九）八月二十四～二十六日、モラロジー研究所において開催された。第一回は、「グローバル時代のコモンモラルティの探求」（平成十四年）と題された一般道徳に関する会議であったが、この第二回は、廣池千九郎という人物に焦点をあて、国際会議の場で集中的に議論した点においてまったく新しい試みであった。

ここに至るまでにはいくつかの段階があり、第一回の会議も重要な布石となっている。²⁷そこでは部分的ながらも廣池とコモンモラルティに関するセッションが設けられ、参加者は同年英訳されていた廣池著『道徳科学の論文』に目を通す機会を持っていた。²⁸また、モラロジー研究所がユネスコと共催で行った、パリ・ユネスコ本部での国際会議（平成十七年・二〇〇五）、同じく東京・国連大学（平成十九年・二〇〇七）の参加者らも、第二回に集うこととなった。

岩佐信道・北川治男監修の報告書『二〇〇九年モラルサイエンス国際会議報告 廣池千九郎の思想と業績―モラロジーへの世界の評価―』（モラロジー研究所、平成二十三年）の構成は次のとおり。

Ⅰ 廣池千九郎―その生涯と思想―

伊東俊太郎『精神革命』の時代と廣池千九郎のモラロ

ジー―残された問題としての『自然』

山折哲雄「日本思想と廣池千九郎―二宮尊徳、福沢諭吉との対比において―」

金生紘「最高道徳に従って―人間の道徳的向上の努力に関する廣池千九郎博士の考え方を理解する―」

オレグ・ベネジユ「軍国主義的武士道への抵抗―平和を指した新渡戸と廣池の業績―」

ピーター・ラフ「廣池千九郎再考、彼が生きた時代に焦点を当てて―道徳、個人、宗教団体―」

立木教夫「廣池千九郎の道徳的体験―『道徳科学の論文』の執筆決定をめぐる伝記的研究―」

井出元「モラロジー研究の成果としての廣池千九郎著『道徳科学の論文』」

Ⅱ 『道徳科学の論文』に関する考察

川窪啓資「西欧のモラルサイエンスから全体論的モラロジーへ」

アン・ヒギンズ・ダレサンドウロ「正義と慈悲―廣池とコールバークの道徳論に関する―西欧人の見解―」

洪顕吉「韓国におけるモラロジーの受容に関する―考察―」
所 功「廣池千九郎博士の『万世一系』最高道徳論の再検討―」

討

マイケル・パレンシアロス「文化を超えた道徳的模範の起源―廣池千九郎とカール・ヤスパースの比較―」

シブランジャン・ミシュラ「廣池千九郎の最高道徳の思想―その現代世界における意義―」

大野正英「廣池千九郎における共同体の概念と伝統の原理」
マーヴィン・バーコウイツ「社会科学、哲学、そして教育―諸学問統合の必要性―」

エルメネジルド・ルワンタバグ「廣池千九郎の知恵と現代における挑戦―教育上の意義―」

岩佐信道「相互依存のネットワークの中で生きる人間のモラルとしての最高道徳」

川勝平太「文明の精神史観の試み―廣池千九郎博士に学ぶ―」

Ⅲ 二十一世紀におけるモラロジーの展開

ブライアン・ゲイツ「モラロジーに関する廣池千九郎の思考における宗教的視点の重要性とその教育的意味」

服部英二「通底の価値―その追求と発信―」

ヴァルター・ドレーヤー「最高道徳と出現する未来」

水野治太郎「正義を補完するケア・ケアを補完する正義
— 公共世界における慈悲実現の課題 —」

コールバーグの系統を引く道徳研究・教育の専門家をはじめ倫理学、比較文明学、宗教学、歴史学等々幅広い分野の研究者が一堂に会した議論には一定の価値があった。しかし幅広いだけに、まとまりや深まりに難があるのは否めない。廣池に関する資料で外国人が読解できるものには限りがあり、断片的理解に留まらざるを得ず、逆に研究実績のある日本人研究者のものは、他分野からも理解されるようにと、概論的な内容に留まった。

その点は、『記念論集』の高い水準とは比ぶべくもないが、この会議の開催と本書の刊行は、廣池によって提唱された道徳論がさまざまな分野へ国際的に広がった先から、廣池の人物研究へと帰ってきたと評することができ、これほどの広い分野から一度に検討される機会も得難いものがある。また、今回の発表をその後の著述の中に生かす研究者もあり、³⁰ 今後の発展の起点となる研究テーマを生み出すことになった。

（三）特集『道徳科学の論文』を現代によみがえらせる試み

廣池の道徳研究を集大成した『道徳科学の論文』は当時の最新科学による研究成果だったが、八十年以上の時を経た今、科

学は大いに進歩し、廣池の頃には仮説の段階であったものがすでに実証されていることもあれば、修正を必要とされる箇所もある。³¹ そこでモラロジー研究所道徳科学研究センター³²では立木センター長の主導の下、近年の研究動向を踏まえ、新たな視点から『道徳科学の論文』を捉えなおすプロジェクトを発足した。三年間の研究成果は『モラロジー研究』（七十一号、平成二十五年）に次のようにまとめられている。

大野正英「時代の変化と道徳科学における課題」

岩佐信道「相互依存のネットワーク、地球システム倫理そして最高道徳」

立木教夫「認知神経科学と進化生物学の出会いが拓く 道徳の科学的研究」

望月文明「利己的本能の再考」

水野修次郎「カウンセリングから考察する『人心の開発と救済の原理』」

竹内啓二「モラロジーとケアの倫理—正義、慈悲、ケア—」
橋本富太郎「『道徳科学の論文』における皇室」

宮下和夫「新たな運用の創出に向けて」

井出元「『最高道徳』と現代—『和』の思想の再発見—」

それぞれの専門の立場から、時代の変化と研究の進捗を前提として、『道徳科学の論文』における主要テーマの展開が集約されており、道徳科学研究を前進させる重要な機会であったと

いうことができよう。ただ、『道徳科学の論文』に残された研究課題全体からすると取り上げられたテーマはその内の一部でしかなく、選ばれたテーマも課題の必要性というよりは論者の専門性から選択されたものであって、必ずしもバランスがとれているわけではない。しかし今回の試みはこれまで個別に進められていた研究を総合し、向かうべき方向と残された課題を明示した成果は大きいといえる。こうした研究は当然、課題の元となつている廣池の道徳論が検討されるわけであり、廣池千九郎研究の前進にとつても意義深いものであった。

おわりに

以上のように廣池千九郎研究は、時代の要請や気運の高まりを受けつつ、あるいは組織的に、あるいは個々の関心によつて着々と積み上げられてきた。全体の流れを顧みると次のようにいえるだろうか。

初期の段階では、廣池の遺した道徳論を確認し、実践のモデルとしてその事跡および思想を部分的に取り上げる個別の研究が手がけられていた。やがて研究所の体制も整い、廣池の生誕百年を機に学術的な研究環境を得て、法制史を中心とする諸々の業績が検討されると、その晩年の道徳論の学問的基盤が整理され体系が明らかとなった。

その過程で廣池研究の視角と方法が提示され、廣池がさまざまな分野に位置づけられるとともに道徳科学（モラロジー）の形成過程が広く深く検討されるに至っている。

このような研究成果が蓄積されることによつて、長年の宿願であつた『伝記 廣池千九郎』の刊行が遂げられた。そして国際的な議論の場が提供され、その道徳論が再検討され現代的に展開する時代を迎えている。

次稿では次の段階として、これまで取り上げてきた研究の分類を試み、そのほかの学術雑誌上の論文を加え、若干の考察を試みる。そうすることによつて今後取り組むべき課題を明らかにしたい。

註

(1) 『道徳科学研究』二十号（昭和四十三年）は、これら（『道徳科学研究所紀要』を除く）四誌における昭和四十三年七月までに掲載された廣池に関する記事をリストアップしており検索に便利である。『道徳科学研究所紀要』は、廣池による教訓など文書の公開が主であつた。『道徳科学研究』は、昭和三十七年に創刊され同四十七年六十二号をもつて終刊する。後述する『モラロジー研究』（昭和四十八年創刊）の前身および当時の研究所における研究紀要的存在ということができ、すぐれた論文もいくつか掲載されている。しかし、研究の「成果を漸次にまとめる」（『道徳科学研究所紀要』第十八号、昭和三十八年、四六頁）ことが主眼であり、発信について

は十分に想定されておらず、外部からはほとんど認知されていない。『モラロジー研究』創刊号（昭和四十八年）にも、同号を紹介する記事（『道徳科学研究所紀要』第二十九号、昭和四十九年、二頁）にも『道徳科学研究』についてはまったく言及がない。こうした事情から、本稿では研究史上に特には取り上げないこととする。

(2) 「広池先生に関する文献目録」[資料が語る広池千九郎先生の歩み]（モラロジー研究所編、広池学園出版部、昭和四十八年、初版）七四〇頁を参照。『社会教育資料』では、継続的に廣池の事跡や書が紹介されており有用なものも多い。また折にふれて特集が生まれ、その中には廣池に関して学術的水準の高い研究も相当見られる。第二十二号（昭和三十三年八月）は「広池博士二十年祭記念特集号」で、宗武志ら廣池の高弟たちがそれぞれの立場から廣池像を論じており貴重な資料となっている。また、浅野栄一郎の『「中津歴史」を編纂される大先生の態度』などは史料にもとづく事跡研究の先駆的業績といえよう。続く第二十三号（三十三年十二月）では、特集「道徳科学の論文について」が生まれ、廣池の『道徳科学の論文』が各方面から検討されているとともに、『論文』引用書目録が掲載されており、書誌学的研究の進捗がうかがえる。第三十一号（三十六年六月）の特集「学者としての広池博士」は特に注目を要する。『古事類苑』や文法、法学など後述する「生誕百年」における本格的研究に先行するすぐれた研究が収められている。そして第四十七号（四十一年十二月）「広池博士生誕百年記念特集号」を迎える。ここでは廣池に関して、専門家による専門的研究が高度な水準で揃えられている。続く四十九号（四十二年六月）「特集広池博士の人と業績」も合わせて必見である。

(3) 発足当時の研究部は、廣池博士資料室、調査室、研究室の三室

体制。廣池博士資料室は、(1)廣池博士遺品及び遺墨等の整理・保管(2)廣池博士著作（遺著を含む）の整理・保管 (3)廣池博士伝記編纂の為の資料の蒐集 (4)その他、以上を職掌としていた。（『道徳科学研究所紀要』十一号、昭和三十一年四月、四四頁参照）。昭和三十年代、廣池については研究にまでは及んでいなかったが、資料の収集・整理は三十七年の廣池博士記念館（現廣池千九郎記念館）開設を挟み着々と成果を上げていた。資料整理については、矢野篤が研究を進めており一部を次のように発表している。口頭発表「廣池千九郎関係資料のアーカイブズ管理史」（日本アーカイブズ学会二〇一〇年度大会、平成二十二年四月二十五日）、修士論文「廣池千九郎関係資料」の生成と管理に関する基礎的研究」（学習院大学大学院アーカイブズ専攻）平成二十三年。

(4) 廣池研究が進まなかったことについて、昭和四十二年四月、長男の廣池千英は次のように語っている。「戦後、二十二年に研究所は復活いたしました。しかしいろいろな運営上の問題とか、専門学校を、これも戦後短期大学に改組し、さらに三十四年には四年制の大学にしてくるといようなことに迫られました。実は筐底にしまっていました遺稿というものを整理し、これを研究し、さらに編纂すると、こういうようなことがほとんどできませんでした。そういうことで不本意ながら、父の学者としての業績の研究は、手つかずのまままで今日に至りましたわけでございます（座談会 廣池博士を語る）『社会教育資料』四十九号、昭和四十二年六月、四七頁）。

(5) 廣池千九郎在世当時には、道徳科学研究所は「研究部」・「開発部」の二部体制をとり、研究部には研究員を置き、さらに助手を任用して研究者の養成を行っていた。このときの研究部の扱いは大きく、学校教育も社会教育も地方組織も、教育関係はすべて「開発

部」の下に置かれており、「研究部」は研究のみでそれに並び立つ存在であった（道徳科学研究所編刊『道徳科学研究所と道徳科学教育』昭和九年、一頁（『廣池千九郎モラロジー選集』二、昭和五十一年、および『モラロジー研究』七十四号、平成二十七年所収）。

組織図は、廣池千英『別科卒業記念帖』第二篇、昭和十二年、六〇頁（同、三、同年所収）、およびモラロジー研究所編刊『伝記 廣池千九郎』平成十三年、六二二頁参照）。しかし研究所は、昭和十六年の解散後、同二十一年には復活するものの、研究部門の再興にまでは至らず、ようやく同三十一年に「研究部」が設置されたのである、すべて初めからの再出発となっていた。

(6) この時期における廣池の学問的業績の顕彰は、大澤俊夫によると、昭和三十一年に道徳科学研究所研究部に廣池博士資料室が設置されて、遺稿の整理がはじめられたことと深い関わりがあり、それまで空白であった廣池の青年期を明らかにした大澤の論考「青年教育者としての廣池千九郎先生」(一)～(三)（『社会教育資料』三十二・三十七・三十九号、昭和三十六・三十八・同年）と、昭和三十七年の大澤の発表「廣池博士の思想形成の歩み」が契機になったものだという（大澤俊夫『青年教師 廣池千九郎 付・廣池博士の学問上の業績』廣池学園出版部、昭和五十七年、「はじめに」一二頁）。また生誕百年に当り、廣池千英の「父の学者としての業績を、この機会に明らかにしたい」との意向もあつたという（大澤俊夫「廣池千九郎編『倭漢比較律疏』の出版をめぐる」『社会教育資料』七十七号、昭和五十五年十二月、六七頁）。

(7) 講演の内容は、『社会教育資料』四十七号（廣池博士生誕百年記念特集号）に収録されている。本号には「生誕百年記念 秋季行事」の日程やその他の講演、廣池に関する資料などもある。廣池千

英の講演「父を思う」や、「廣池博士の思い出」の枠に、高原美忠皇學館大学学長（当時）の「神宮皇學館時代の廣池先生」はじめ、佐藤寅二「中津高等学校校訓時代の廣池博士」、小川鼎三「小川含章と廣池先生」、安田尚義「早稲田大学講師時代の廣池先生」もあり資料的価値は高い。

(8) 内田は廣池の蔵書の中から句読・訓点が施された本書を見出すと「今日においてさえ本書を凌駕する六典はない。廣池博士の業績の中で、恐らくもつとも長く生命を保つ業績であろう」（欠端實「時間をたぬく至誠の人、内田先生」『モラロジー社会教育資料』百十二号、九二頁）と評価し、校訂に渾身の力を注いで出版へと導いた。山根幸夫の書評によれば「六典を利用する研究者は、今後は必ず本書を参照しなければならぬ。全巻に訓点・送仮名が付されており、且つ現在我々が利用できるすべての六典に関する資料との校合がなされている本書の価値は実に大きい」（『東洋学報』五十六巻一号、昭和四十九年、五二頁）。また第二版が平成元年に刊行され、九か所の補訂と新たに内田による大部な解題が付せられた。この解題も研究史に加えらるべきものである。なお本書は、影印本が中国西安の三秦出版社からも刊行されている（礪波謙「京都の中国学」『大航海』六十六号、平成二十年、八六頁参照）。

(9) 内田によると本書の特記すべき点は次の二点、「そのひとつは、わが国の大学における『東洋法制史』の最初の講義であるという点、いまひとつは内容的に、中国・朝鮮・日本三国の法典編纂を中心とする講述であつて、『東洋』の法制史の名に値するという点である」（本書解題。解題は『先学のあしあと』二四二～二四五頁に収録。同じく「祖述と解釈―廣池博士の『東洋法制史講案』の修補に因んで」も参照）。本書は編纂者の内田の意向により、法

制史学会関係者に頒布された。反響等は、前掲大澤俊夫『青年教師廣池千九郎』まえがき参照。

(10) 本書は、廣池の『東洋法制史序論』と『東洋法制史本論』(『支那古代親族法の研究』「支那喪服制度の研究」)「韓国親族法に於ける親等制度の研究」を内田による校訂を経て収録したものである。井出元の『人生の転機廣池千九郎の生涯』(廣池学園出版部、平成七年)の「プロローグ」には、『東洋法制史研究』の広汎な引用書と校訂の困難さが著わされている。本書掲載の内田の「解題」は東洋法制史のみならず、廣池の業績全般にわたっており、これ自体が優れた廣池研究といえる。

(11) 内田の業績は後述の内田著『先学のあしあと』からもうかがえるが、他者の視点から書かれたものには「内田智雄先生を偲ぶ」(『モラロジー社会教育資料』百十二号、平成二年)がある。大澤俊夫は内田の尽力を称え、「先生六十年の研究生活の三分の一は、廣池博士の埋もれた業績発掘とその位置づけに捧げられたもの」、「晩年の先生の一日一日は、まさに廣池博士とともにあったと思われる」と記している(同、八八頁)。なお大澤によるこの追悼文「廣池博士の業績発掘に捧げられた後半生」は後に、大澤俊夫「師の心を求めて」(『モラロジー研究所』平成十七年)に収録。

(12) もとは前掲『社会教育資料』四十九号、昭和四十二年六月。

(13) 小沢は「郷土史・地方史としては、この『中津歴史』は、この時期では恐らくはじめてのもの」(『先学のあしあと』一八頁)と言っており、その後もこれに対する異論は出ていない。さらに後年、『中津歴史』が日本で初めて「アーカイブズ」を提唱したものであることも明らかになっている(安藤正人・青山英幸編著『記録史料の管理と文書館』北海道大学図書刊行会、平成八年、二六二・

二八三頁参照)。廣池千九郎のアーカイブズにおける業績については廣池千九郎記念館矢野篤学芸員に示唆をいただいた。

(14) 内田に言わせれば、廣池が最終的に道徳科学の創唱に専心したことは「もはや凡庸な書齋の一学徒として終始し得ない憂国愛民の思想が横溢して、それが博士を駆って、道徳科学の道へと進ましめたもの」(『記念論集』序、六頁)とされる。廣池自身の言葉では、昭和七年三月にはじめて開催した講習会(大阪)の際に作成した「モラロジー(道徳科学)講習会規則」に、「モラロジー研究所は陛下に対し奉り又国家に対して報恩の為モラロジーの研究を為し且国民の道徳的精神を開発することを目的と為す者なれば今回の講習の如きも会員より授業料徴収することなし」との文言が見え、また「私は国家伝統たる祖宗の大神様并に陛下の御扶育の大神恩を思ひ之に報恩の為としてモラロジーを造り人心の開発に努力した」(『寄付行為と謝恩行為との結果の相違』)といい、国民の道徳的精神の開発および人心の救済と皇室の恩恵に報いることを呼応させている。最晩年の回顧によれば、そもそも少年時代に学問を志した理由が「正しい学問を致し、而して皇室に貢献し奉りたい」(『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』昭和十六年、二三頁)だった。(15) 利光は、廣池が本書を脱稿していながら出版しなかったことについて次のように惜しんだ。「もし、この研究が明治三十年代に公表されていれば、日本の律令学は少なくとも今より三十年は進歩していたであろう」(『その当時(明治三十年代)』に発表されておれば、廣池博士が近代律令学を日本で初めて基礎づけた人として永遠に律令研究史上に、不滅の光を放つことになったのに、まことに残念です」(大澤俊夫「廣池千九郎編『倭漢比較律疏』の出版をめぐる」『社会教育資料』七十七号、昭和五十五年、七二頁)。その

後、近代律令学を基礎づけたのは瀧川政次郎であった。利光が瀧川に聞いたところによると、昭和の初年、廣池は一度、瀧川に会っているが、律令のことには一言も触れず、「道徳の科学的研究は可能だ」とモラルサイエンスをまくしたてて立ち去ったという（同。大澤「廣池博士の人と業績」『社会教育資料』五十三号、昭和四十三年、一三三頁にも同様の記述がある）。そのころには廣池の関心は律令から離れてしまっていたのだった。ただし、瀧川自身の発言による矛盾もある。瀧川は法制史学会総会のプログラムの一環として昭和五十二年四月四日、廣池学園を訪れ、歓迎パーティーの席上、こう話している。「私は大正十二年に岳父石本恵吉（元男爵）から、今日華族会館へ行つてこういう話を聞いた。モラル・サイエンスとはおもしろいじゃないか」と廣池さんのことを聞いたことがありますし、また穂積重遠さんの研究室で直接廣池さんとお会いし、モラル・サイエンスのお話を伺い、東洋法制史について学問上の意見を交わしたこともあります」（『モラロジー研究所報』昭和五十二年六月号、一二・一三頁）。

(16) 内田もこの点について「結局、廣池博士が『倭漢比較律疏』で採られたやり方が一番良い方法であるとして、この方法によって研究が進められています」「廣池博士の方法が一番学問的な方法であり、この方法によってやっつていこうという結論が出されたわけでありです」（『先学のあしあと』二七八頁）としている。

(17) 藤田大誠『近代国学の研究』第五章（弘文堂、平成十九年）、黒川典雄「『古事類苑』の編纂」（『人間文化研究情報資源共有化研究会報告集』二号、平成二十三年）など。

(18) 同「月報」は最後に「その学問・業績については『記念論集』（廣池学園出版部・昭和四十二年刊）に紹介されています」として

いる（『古事類苑』月報六、「編集室より」文学部第二篇、吉川弘文館、昭和四十二年、一二頁）。

(19) 横山は病苦を押して本書を執筆し、脱稿とともに逝去した。死を直前にした著者の、師・廣池千九郎への追慕と安心立命の境地が滲む不朽の名著である。拙稿「モラロジーの創始者・廣池千九郎」（『大学生のための道徳教科書』麗澤大学、平成二十一年）も本書をモデルにしている。記してここに著者の境地を顕彰したい。

(20) 「道経一体」という言葉は、廣池自身は使用していないが、廣池の経済思想を端的に表している。この言葉の初出は、モラロジー研究所編刊『経営と道徳』十七号、昭和四十八年五月。論考としては、永安幸正「知識・道徳・経済の三位一体説」『経営と道徳』十八号、同年七月が最初である（モラロジー研究所道徳科学センター、平成二十六年四月十六日廣池千九郎研究会、梅田徹発表「廣池千九郎における新たな展開の模索」道経一体思想を具体的素材として」参照）。

(21) 特に小川含章については、それまで他の三人に比べて不明な点が多く、この研究で明らかになったことには重大な意味がある。廣池の尊王思想や歴史教育の重視などに見える大義名分論は小川から継承されたものだった。

(22) その後、穂積と廣池との関係については井出がより詳しく述べている（井出元「日本人の道徳」を考える―廣池千九郎の生涯―」（『モラロジー研究』五十七号、平成十八年、一三二頁））。

(23) 下程勇吉「廣池千九郎の人間学的研究」モラロジー研究所、平成十七年、三三三頁。本書は、先の論文「廣池千九郎」と後掲の「神の原理」を中心にして、諸論考を一冊にまとめて刊行した下程没後の論集である。筆者も編集委員の末席にあり、哲学から教

育、家庭のあり方にまで至る下程の見識の広さと深さに驚嘆した。それと同時に、下程の『二宮尊徳の人間学的研究』（広池学園出版部、昭和四十年）や『吉田松陰の人間学的研究』（広池学園出版部、昭和六十三年）に対して見られた浩瀚な研究に比すると、廣池千九郎研究はアウトラインを描いた段階に留まっていると思われる。生前に『廣池千九郎の人間学的研究』が下程本来の学識が結実して刊行されなかったことが惜しまれた。

(24) 廣池の提唱した道徳論を理解するためには、本書のように廣池の思想形成をたどることも肝要であるが、個々のエピソードを熟考することもまた肝要である。井出は本書に先立ち、廣池のいくつかの重要な事跡にスポットを当てた『人生の転機 廣池千九郎の生涯』（広池学園出版部、平成七年）を刊行していた。さらに、廣池の人となり、著述の背景、後世への配慮などを『廣池千九郎の遺志』（モラロジー研究所、平成二十三年）に著わしている。

(25) 註(3) 参照。『伝記 廣池千九郎』が刊行されるまでこの種の物は、古くは『道徳科学の論文』付録の『廣池博士の学問上における経歴』（昭和三年）があったが、これは学者としての活動が主であり、それ以外はほとんど触れられていない。人生全般を扱うものは下って小冊子『廣池千九郎先生の生涯』（広池学園出版部編刊、昭和四十一年）や資料集の前掲『廣池千九郎先生の歩み』のほか、横山良吉前掲『廣池千九郎先生小伝』、山岡莊八の小説『燃える軌道』全五冊（学研、昭和四十九〜五十三年）および光山勝治『劇画 廣池千九郎』全五冊（広池学園出版部、平成四〜六年）などが存するのみだった。ほかには、映像のナレーションを編集した、広池学園出版部編刊『遙かなる悲願』（昭和六十年）、子供向けの、モラロジー研究所監修『少年少女のための廣池千九郎先生の一生』（広池

学園事業部、昭和四十九年）などの関連書籍がある。廣池ゆかりの地を順に訪ねて回った、モラロジー研究所『温故知新 廣池博士の足跡をたずねて』（広池学園出版部、昭和五十二年）も豊富な情報がある。

(26) 本書の内容および水野の業績については、川久保剛による書評『モラロジー研究』六十三号、平成二十一年掲載に詳しい。

(27) 平成十四年（二〇〇二）八月五〜九日、千葉原柏市のモラロジー研究所において、「モラルサイエンス国際会議」が開催され、報告書『グローバル時代のコモンモラルリティの探求』（モラロジー研究所、平成十七年）が刊行された。本書の構成は、I グローバル時代とコモンモラルリティ、II 廣池千九郎のコモンモラルリティへの貢献、III コモンモラルリティと世界倫理の三部構成となっている。II においてコモンモラルリティの観点から廣池について論及された。報告者と論題のみを挙げる。井出元「廣池千九郎の業績」、立木教夫「廣池千九郎の道徳体験―四つの自己反省の事蹟を通して探る―」、永安幸正「コモンモラルリティと最高道徳―基本資料の提示―」、鈴木康之「信仰と道徳」、大野正英「自我没却の原理と正義及び慈悲の原理」、北川治男「人間社会と伝統の原理」、水野修次郎「人心の開発と救済の原理」、松浦勝次郎「道徳的因果律の研究」。本書の英語版は『SEARCHING FOR A COMMON MORALITY IN THE GLOBAL AGE THE INTERNATIONAL CONFERENCE ON MORAL SCIENCE IN 2002』LANCER'S BOOKS、平成十六年（二〇〇四）。

なおこの国際会議との関連で、『モラロジー研究』（五十二号、平成十五年）には特集「コモンモラルリティとしての最高道徳」が組まれ、短編であるが、欠端實「最高道徳」が生れた歴史的背景と今後の課題」、井出元「廣池千九郎における『普遍的なるもの』の探

求」(ピューター・ライフ「The Nature of Science in the Moral Thinking of Chikuro Hiroike」がある。

(28) 岩佐信道が海外における道徳教育の会議にこの英訳『道徳科学の論文』を折に触れて紹介し、関心を示す研究者は増加傾向にあった。例えば、平成二十一年(二〇〇九)八月、オランダ・ユトレヒト大学で開かれた道徳教育学会(A.M.E.)の大会において「モラロジーという科学―比較の観点からの批判的評価」と題するシンポジウムが開かれる等(岩佐信道・北川治男監修『二〇〇九年モラルサイエンス国際会議報告 廣池千九郎の思想と業績 モラロジーへの世界の評価』モラロジー研究所、平成二十三年、三頁)。

(29) ローレンス・コールバーグによる道徳教育研究の国際的ネットワーク形成とモラロジー研究所における国際会議開催の流れについては前掲拙稿「廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論(一)―道徳における廣池千九郎の位置」参照。

(30) 川勝平太は『近代文明の誕生―通説に挑む知の冒険』(日本経済新聞出版社、平成二十三年)において、章立てを起承転結として「結」を『文明の精神史観』試論」と称してその前半に『文明の精神史観』序説―廣池千九郎博士に学ぶ」を、本会議の報告書から転載している。マーヴィン・バーコウィッツものに、廣池の道徳論を『You Can't Teach Through a Raft』(邦訳 中山理監訳『学校が変わるスーパーテクニク』麗澤大学出版会、平成二十六年)に用い、会議参加者らとの人格教育に関する共同研究へと展開している。所功も『皇室に学ぶ徳育』(モラロジー研究所、平成二十四年)に発表内容を収録し皇室における道徳の研究に敷衍している。なお、洪顕吉については会議に先立ち、すでに『廣池千九郎のモラロジー』(韓国語)寶庫社(韓国)平成十七年)を刊行していた。

(31) 廣池自身、『道徳科学の論文』の中で三十四項目におよぶ将来の研究課題を提示し、科学の進歩に従って『道徳科学の論文』を改訂していくことを後進の研究者に託している。廣池の遺した課題およびその後の研究の動向については、水野治太郎(「研究ノート」モラロジー研究の現状と課題)、『モラロジー研究』一号、昭和四十八年)、および望月幸義「モラロジーとは何か」(同、二十三号、昭和六十二年)において検討されている。

(32) 同研究所研究部は平成十三年四月改組されて、道徳科学研究センターとなった。構成はセンター長以下、生命環境研究室、社会科学研究室、人間学研究室、教育研究室、廣池千九郎研究室の五室体制。

(キーワード) 研究史、廣池千九郎、内田智雄、下程勇吉、井出元